



7月号

ひだまり

今月のエッセー

きもだめし

子供たちが首を長くして待っていた夏休みがやってきました。皆さんはどんな夏休みを過ごしていましたか？夏休みと言えば、虫取りやスイカ割り、花火と色々ありますが、私にとっては「きもだめし」も外せない思い出です。

小学四年生の時、サマーキャンプに参加した私は初めてきもだめしを体験しました。その時のきもだめしは真っ暗な森の中を決められたルートで歩かなければならないものでした。

男の子と女の子、二人一組で行われたきもだめし。周りの男の子は「全然怖くない！」なんて強がっていましたが、怖

編集後記

七月も半ばを過ぎ、関東でも梅雨明けの兆しが見えてきました。平年よりも低い、涼しすぎる気温からの脱出に一安心しています。ところが、今年の今頃の様子を、当時の私は編集後記の中で次のように書いていました。

「今年の夏はどうもせつかちのようで、例年よりも早く梅雨前線を押しのけたかと思えば、カンカンにギラついたお日様と一緒に猛暑を引き連れてきました。記録的な暑さにうんざりしてしまいそうです。」

暑すぎてもダメ。涼しすぎてもダメ。なんとも自分勝手ですが、気持ち良く過ごせる丁度良い塩梅を、お天道様にお願ひしたい今日この頃です。

◆山内弾正やまうちだんじょう

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

がりな私は強がることすらできず、黙り込んでいました。「本当のお化けに出会ったらどうしよう」と不安ばかり募らせ、最悪な気分でした。

いよいよ自分の番。空いっぱい輝く星をたよりに、森の中へ入っていきます。すると、どこからともなく低い人の声が耳に入ってきました。それはなんだか聞き覚えがある言葉でした。

「色即是空 空即是色・・・」

そうです、『般若心経』です。おそろしく怖い雰囲気を出すために、テープか何かで再生していたのでしょうか。案の定、一緒にいた女の子は怖がっていました。しかし、普段からお経を聞き慣れていた私にとっては、むしろ安心感を与えてくれるものでした。「お経が流れたら、お化けが成仏してしまうのではないか」と心配する余裕も生まれ、無事にきもだめしを乗り越えることができました。

大人になった今でも、脳裏に焼き付いているきもだめしの思い出。『般若心経』には大きな功德があると思ひ知った夏の夜でした。

◆秦慧洲はた えしゅう

法のお話



二年度
菊地 志門
きくち しもん

目の前のひとつ

雪が舞う今年一月、私は曹洞宗の大本山永平寺で「眼蔵会」という行事に参加させていただきました。「眼蔵会」は坐禅を行じるとともに、道元禪師の著述である『正法眼蔵』を学ぶ会のことです。三年前に私は永平寺で修行をしていました。久しぶりの永平寺。相変わらず、その景色と雰囲気には圧倒されてしまいます。鮮やかに雪化粧した仏殿や法堂に、光が射して銀色に映る見事な景色に目を奪われます。廊下の奥に見えていた修行僧は、白い吐息を吐きながら足早に何処かへ消え去っていく。自然の中に溶け込んでいく永平寺をしみじみ

と味わったのでした。
修行時代、はじめは精一杯で、自然に目をやり、雰囲気を味わう余裕はもちろんありませんでした。
「明日行う役割はこれでいいのだろうか。もう一度確認した方がいいな」先のことばかりつい考え過ぎ、目の前のことはどうしても疎かに。少し慣れてくると今度は、「今頃、家族はなにをしているのか」といった思いにとらわれ、人の話を聞いていないことも多々ありました。
そんなある日、いつものように掃除をしていると、先輩の和尚さんから言われました。
「目の前のことを丁寧やりなさい」
正直、最初はムカツとしましたが、この言葉はそれからの修行の日々を大きく変えさせてくれるものとなったのです。
曹洞宗のもう一つの本山である總持寺をひらかれた、瑩山禪師が次のような言葉を残されています。

飯に逢ては飯を喫す

お茶が出たら、お茶を飲む。ご飯が出たら、ご飯を食べる。いただいたお茶に対して、「ぬるいな」とか「ジュースの方が良かったな」などと、余計なことを考えず、目の前のお茶をいただける「今」に感謝しながら、丁寧に味わう。それが大切なのだ。教えてくれる言葉です。

同様に、掃除するのであれば「掃除という今に集中する」。人の話を聞くのであれば「ただ丁寧に話を聞く」。先輩の和尚さんの言葉は日々の生活を疎かにしないよう、今を丁寧に生きることへと繋がります。修行を見直すきっかけとなりました。「とにかく、今できることを行う」。

それからは坐禅や食事、掃除に至るまで丁寧に修行していきけるようになり、少しずつ心にも余裕ができるようになりました。数多の「今」の積み重ねが未来に繋がっており、まず「今」を精進することが大切であると瑩山禪師は説いているのだと思います。

茶に逢ては茶を喫し、

今回は私の故郷、埼玉県秩父市のお祭りを紹介します。秩父市の中心に位置する秩父神社では、毎年七月と十二月に行われるお祭りがあります。夏に行われるのは秩父川瀬祭、冬のお祭りが、日本三大曳山祭りの一つ、秩父夜祭です。

秩父の人は、このお祭りを生き甲斐にしているといっても過言ではありません。中には「年が明けたら川瀬祭りの準備、川瀬が終わったら夜祭りの準備。祭りが終わってやっと新年を迎えられる」という人もいます。一年中、あちこちでドコドコと太鼓を練習する音が聞こえ、町の人が総出で高さ十二メートルにもなる傘鉾や屋台を組み立て、お祭りの準備をします。もちろんお祭りの日には仕事は休み。大人も子供も一緒になって盛り上げます。

秩父川瀬祭りは、梅雨が明け七月に二日間かけて行われます。この川瀬祭りの見どころは何といっても「神輿洗いの儀式」です。氏子たちが、四百キロもある神輿を担ぎ、荒川の清流に入って「わっしょい！」という掛け声と共に神輿を洗い、疫病が流れるようにと願いを込めて禊をします。

私が小学生の頃、夏休みに入る日がお祭りの日で、お小遣いを握りしめ、友達と自転車をこいで行った思い出があります。露店でチョコバナナを買って食べたり、くじびきをしたりして楽しめました。ぶらぶら歩いていると花を纏った大きな山のような傘鉾が急に目の前に現れ、その迫力と荘厳さに驚きました。大人も子供もみんなで傘鉾を引っ張っていたので私も一緒に参加させてもらいました。「わっしょい！」と力いっぱい曳いて、ご褒美に貰ったアイスが火照った体に染みて美味しかったことをよく覚えています。

夜になると、神社に集結している傘鉾は各方面へ曳き別れていき、最後のこの瞬間に最高潮を迎えます。太鼓を叩き合い、声を出し合い熱気に包まれながら雪洞の明かりが一つ、また一つと消えていきます。川瀬祭りの余韻も束の間、冬の秩父夜祭に向け、またどこからか太鼓の音が聞こえてきます。次は十二月の冷たい空気をもともしない熱気が町に溢れるのが待ち遠しいです。



町を練り歩く傘鉾と屋台



丹羽隆浩の

小噺



川に入って行う「神輿洗いの儀式」